

子どもの遊びを理解するために

Understanding Children's Play
R.E. Hartley, L.K. Frank, R.M. Goldenson
Columbia University Press. N.Y. 1952

この章にかかれていることは別だん目新しいものではないし多くの読者にとってはむしろ当りまえのことかもしれない。しかし、さまざまな子どもの観察記録が豊富にありこまれているので、読んでいて楽しいし、また内容を理解するうえにもたいへん参考となる。ただ、ここでは紙面の都合上そのような記録のくわしい紹介ができないことを残念に思う。

まえがき

ボスターカラー、イーゼルペイント、絵筆、クレヨン、画用紙などは幼稚園でよくふつうに使われているものであるが、なぜそのようなものが使われているのか、どうすればもっともよく活用できるかについては関心がうすい。その上このような材料の使い方にたいして、人々の間にはまだ誤った考え方や臆測がある。そのなかでもっともひどいものは、子どもたちが絵をかくときは外界のものを写しとるのだ、とする考え方である。しかしアルシュラー、ハトウィックのような人々もいつているように

幼い子どもは何か目的をもってかいているのではなく自分たちが何をどう感じているかを表現しているのであって、よくおとながたずねるように「何をかいているの」というような質問は子どもにとってまことに迷惑といわなければならない。子どもが絵をかくのは、それが筋肉運動のはじまりであり活動のひろがりであり、また心の奥底にあるものの表現となるからである。

この章でこれから述べようとすることは次の二つの点についてである。

○絵が子どもにとってどのような意味をもっているか(子どもが絵をかくまでの過程、絵は子どもにとってどんな役割を果たすかなど)。

○絵は子どもを理解し指導していく上にもどのような手がかりとなるか(子どもが絵をかいているときの状態およびできあがった絵からどのような手がかりが得られるかなど)。

子どもの発達の程度を評価する、あるいは治療の目的のために絵を分析研究するな

どということはおきられた絵の見方であり、またかいたり色をぬったりというような技術の向上を求めたりすることも誤りである。

1 絵をかくまでにどんな段階をふむか。

子どもは絵をかくまでに次のような三つの段階をふんでいく。

①材料をきわめて満足するまでいじりまわす。

②自分の外に何かを求めようとする。まわりの世界に興味をもつと何かをつくり出そうとするがはつきりした対象もなければ目的もない。そして自分が筆をもってみると案外自分の思うようにはかけないことがわかる。これは子どもにとってひとつの驚きである。

③ただ楽しくかいているだけでなく何かひとつのものを描きだし自分の作品をもとうとする。しかしまだはつきりした対象を描きだすには至らない。

こうして子どもたちは絵をかきはじめる。絵をかくことがどのような意味をもつ

ているか以下順を追って挙げていくことにしたい。

2 表現としての絵。

絵をかくことには二つの主な機能がある。ひとつは心のなかにある無意識的なものの表現、もうひとつは情緒的な抑圧からの解放である。この二つの機能をとおして子どもは絵を表現手段として使うわけである。アルシュラー、ハトウィックは、子どもはことばに表わせない経験を表現するためにクレヨンやペイントを使うのだといい、またブランドは、絵をかくことは子どもにとってひとつの伝達であるといっている。くり返しになるがこの点からいってもおとなが子どもにむかって何をかいているなどとたずねるのは愚問であることがわかるであろう。二才から四才までの子どもにとって、絵をかくことがとくに表現手段としてふさわしく、またちょうどこの年齢の子どもが絵をかくことにもっとも強い興味をもっているのはたいへんおもしろいことである。

3 抑圧からの解放としての絵。

アルシュラー、ハトウィックは解放手段としての役割について次のような点を挙げています。

①絵をかいているときにはその他の活動をしているときより自由であり個人が活かされる。

②純粋な治療的価値がある。

③絵をかくことがもつとも抑圧からの解放に役立つのは次のような子どもの場合である。

○ナーサリースクールにいつているような幼い子ども。

○家でいろいろな規制を受けすぎている子ども。

○葛藤がよくしかもそれを外へ出さず自分ひとりで解決しなければならぬ子ども。

またブランドは、攻撃的な子どもにとっては攻撃性のはけ口として他ののはけ口より安全でありひっこみ思案な子どもにとってはのびのびさせるのに効果があるといつて

いる。ペンダー、ラバポートは、精神的に大きな悩みをもつ子どもはその恐怖、不安の対象を動物的な形で表わす傾向があると述べている。以上いろいろな考えがあるが、ここで多くの人の一致した意見として警告をかかけておこう。即ち絵を理解するために多くの言語化されたもの―日常生活のいろいろな面の観察といかえてもよいと思う―が必要であること、絵を理解すること自体がたいへんな技術を要するということである。次に解放の四つの機能について述べたい。

(1) 絵をかき塗らたくる。

これは既成の形やある制限された形をくずすことになるので抑えつけられている子どもにとっては最良の表現手段となり得る。また色をまぜ合わせていろいろな色を作りだせるので取り扱いが簡単である。消極的でその上、手を汚したりすることの大きい子どもがえのぐでかいているうちに筆をすてて手をえのぐにつっこんでかきはじめたという観察記録などはそのことを

よく示している。

(2) 禁止をとり除く。

抑圧されひっこみ思案になっている子どもには絵をかくことが大きな効果をもたらすわけであるが、この場合教師はいろいろな状況に対する子どもの反応をよくよく観察し、何が絵をかくことのきつかけとなっているかをすばやく感じとらなければならぬ。というのは、ひっこみ思案、消極的といってもいろいろなタイプがあるからである。知的に早熟で機械いじりや積木の好きな子ども、何事にも興味を示さない子ども、友だちが少ない子ども、さまざまであらう。

(3) 攻撃性のはけ口となる。

絵をかくことは抑圧された怒りの感情のはけ口としてひじょうに健康的であるといえる。人や物にあたるよりもずっと抑制された状態にあるので、はたしてどの程度、またどのようにして攻撃的な感情が発散させられるのかはつかみにくい。絵をかくているときの筆の使い方などを見ればある

程度はわかるであらう。しかしこれとても深い知識とこまかい観察が必要である。なおその絵のもつ意味を知ろうとするには絵をかく直前と直後の行動もよく観察しなければならぬ。

(4) 不安から解放する。

ある子どもにとっては絵をかくことは不安の表現でありそれによって心の緊張をやわらげることができる。しかし不安な気持ちを極端に攻撃的な行動でしか表わせない子どもにとっては絵をかくことがかえって不安を表面化し緊張をたかめてしまうことがある。これも観察記録のひとつであるが、ある四才の男の子は社会的行動がよく発達しているにもかかわらず、ひじょうに消極的などときといひようもないほど攻撃的なときがあり、その原因として他人から認めてもらいたいという欲求が無視されていたことが挙げられたが、絵をかくことはその子どもにとって不安を与えるものに過ぎなかった。

抑圧からの解放として絵を考えてみると

どちらかといえば攻撃的な子どももより緊張しすぎる神経質な消極的な子どものほうが効果は大きいようである。しかし材料が与えられたときのその子どもの状態によって効果も変わってくるものであるから、どちらとはつきりきめてしまうことはできない。

4 子どもが絵をかいている状態を理解することによって得られる手がかり。

これまでは絵をかくことが子どもたちにとってどのような意味をもち、どのような効果をもたらしたかについて述べてきたわけであるが、ここでおとなの立場から、子どもの発達あるいは欲求を知る手がかりとして絵はおとなにどのようなものを提供してくれるかという点に関心を向けてみたい。

子どもの絵を診断的に使うことにたいして、いろいろ研究もされているが、そのなかでも就学前の子どものついでにされたすぐれた研究はアルシュラー、ハトウィックのものである。これは三才から六才までの子ども数百人について絵とパーソナリティーの関係をあきらかにしようとしたもの

であるが、結論として挙げられていることがごくあたりまえの二、三の事実にすぎなかったことは興味ぶかい。色の選び方、筆の使い方、紙面の使い方などが子どもの生活のなかでおこっている事柄、あるいはそのための心の動きの手がかりとなっているような事例はたくさん出ているが、一貫した原理になってこないからである。この点で子どもは積木あそびのときでも絵をかいているときでも同じように自分を表現しているわけで、絵をかいているときの状態からほかの場合と同じようにその子どもの行動や心の動きのある一般的な傾向をよみとり得るに過ぎない。ただ絵をかいているときの状態とその他のときの状態について注意すべきことは、両者があまりに違いすぎる場合、そこに問題がないかどうか観察配慮を怠ってはならない。また子どもが年齢不相応にひくい段階のかき方をしていた材料が適当かどうかというような反省も必要になるであろう。できあがった自分の絵に名前をかいてそれを誇示する子どもは

仲間から認められていない、あるいは家で批判されすぎる子どもであるとか、できあがった絵をすぐ破りすてたりする子どもは自分の能力やおかれてる地位に自信のない子どもであるとかいわれているが、このようなことも必ずしもあてはまるとはいえないので、絵をかいているときの状態からすべてをおしはかろうとすることは避けなければならない。

5 絵そのものから得られる手がかり。

子どものパーソナリティーと絵の間に一貫した関係がないことはさきに述べたとおりであるが、しかし絵に子どもの心にひそんでいるものが表れてくることは事実であり、したがってできあがった絵そのものにはその一般的性質としてやはり価値のある手がかりがあるものと考えてよいわけである。多くの人の一致した意見では、色のぬり方、紙面の使い方などすべて子どもが周囲の世界に親しもうとしていることを暗示し、また色の選び方が心の動きを暗示していることも事実であるが、どの色がどのよ

うなことを暗示しているかというような特殊な事情についてははっきりしていない。

意見もわかれているのが現状である。たとえば色の選び方については次のような説がある。

○黄色と赤——四才前までの自覚性を表わす。

○青と緑——感情の抑制を表わす。

○赤——攻撃と憎しみを表わす。

など。

色のぬりすぎというようなことについて、それを情緒的なものと結びつけて考える者、そうでない者があり、紙面の使い方や線のかき方によってパーソナリティーを規定している者もある。いずれも誤りとはいいがたいが、結論としていいたいことは、どんな場合でも絵をかくことは子どものパーソナリティーのある一面を表わすだけであり、その点では他の活動も絵をかくことと同様に考えられなければならないということである。例外的に絵だけが手がかりとなって家庭環境やパーソナリティーすべて

があきらかになった子どもの例も二、三出ているが、そのような場合はむしろ稀で、絵や絵をかいているときの状態の分析だけから子どもの行動、性格などを判断することは危険である。

6 教師への示唆

まず四才以下の子どもは一般に絵をかこうとはせずむしろいじることに興味をもつということを忘れてはならない。

絵をかくことは子どもにとって経験や情緒を表わす手段であるから、子どもがかきたいと思うときいつでもかけるように、材料、環境をととのえておくことが必要である。えのぐの数は制限しないほうがよい。

制限したほうがよいという意見もあるがこれはプラスチックの原因になりかねないからである。また、えのぐを使つたあとの始末がたのしくできるように石けん、ブラシなども用意しておいたほうがよい。

自分でおかきなさいの一点ばりは避けるべきである。ことにひっこみ思案な子どもには絵をかく楽しさを教えてやらなければ

ならない。教師もいっしょにかいてやる必要があるである。

何をかくか、どのようにしてかくかというようなことについて教えてはいけない。技術的な向上を期待してはならないからである。いつも喜んで楽しく絵がかけるような雰囲気をつくっておくようにしたい。お天氣のよい日には戸外でかくのもよいことである。

以上

(東横学園二子幼稚園 河尻朋子)

幼稚園で絵を描かせるのは、美的感覚の芽生えを養うと共に、発達に本質的な能力を養っているのであることを考えなければならない。子どもは、おとなには理解できない絵をよく描く。この絵も、ことばの説明のついた時、生きいきとくることは、私共のしばしば経験することである。

幼児期における描画活動においては、子どもに、十分にいろいろのものを描かせ、形や色や、それに伴う運動感覚および種々の材料などの経験を豊富に与えることが大切であると言える。

そしてこのような意味での描画活動は、その他の探索的活動、すなわち自由遊びや、さらに構成された遊びなどの経験によって養われるものと共通の能力を養うことができる、と考えられる。